

鷄頭 戀茸

石垣の鷄頭淋し本妙寺

初茸の薪と共に賣られけり

君逝矣われ又何をか樂まん秋の暮

我戀は君しらす菊のまばみ行く

わが戀や世をうし山の秋の風

三井寺は酒僧の多き冬籠

大三嶋松もまぐれて冬ごもり

廻廊に時雨ふりこむ夜明哉

瀧つばに木の葉ちりこむ時雨哉

嶋守の千鳥なく夜は時雨けり

冬籠 時雨

後撰百人一首評釋 (承前)

宜秋門院丹後

忘れじの言の葉いかに成にけむたのめし暮は秋風そふく

たのめしその夕方にはや心がはりけむ秋風のみふきて音づれもなしとなりた

のめはこの方よりたのむにあらすかなたより頼まする心なり君をわすれじと

いひてたのれに頼ませしなり自の時は麻行四段他の時は麻行下二段なり

俊盛法師

衣うつ音をさくにぞしられぬる里遠からぬ艸枕とは

禾の舎あると

雨塔 女月 長陽 露塔 女月 木岡 斬水 石崖 女月

脚枕は旅寝することなれば旅寝とかへて心うつべし、所もしらぬ所に野宿したる時のありさまをよめるなり、法師なればこの歌實際の歌なるべし、

永陽門院少將

あはれにもめぐりあふ夜の月かげを思ひいれすや人はみるらん
首尾を味ふべし、我はあはれに見れども人はさはみまやあらんとなり

花山院

木の本をすみかどすればおのづから花みる人となりぬべきかな

人は境遇によりて、愚にも賢きにもうつさはうつさるゝものなり、木の本にすめば心なくとも花見る人となりぬべし、この御歌肝銘し奉つるべし、すればと過去にて起りなりぬると過去にて結ぶ、これにて實際の御歌となりぬるなり、氣をつくべし、

在原元方

あら玉のどしの終りになるごと、に雪も我身もふりまさりつゝ
なることにと起りまさりつゝと結びて、毎年年のふりゆくさまをみせたる妙なり、何の異なるふしもなき歌なれども、感ふかし、そのうへ、あら玉といふは、年の冠詞なれども、こゝにては終れば始まり、始めれば終るといふ終の字にひいて、面白し、一字を下せば、一字下したるほどの用なかるべからず、

大藏卿爲家

天の川秋の七日をなかつて雲の上にもおもひけるかな
天の川にて秋の七日に、二星のあふせをながめて、雲井の上そのごとくおもひけるが、今は我が身の上となりぬることよど、おもふ人にたびく、あはれぬ情をよみしなり、すべて、人の事とおもふとは、皆一たびは、我が身の上にてあらるゝことあるものなり、むかしのひじりのたもひやりといふことを、くりかへしの玉ひしも、このゆるなり、人の死にしを、わらひながら、かたらふ人もあるゆゑ、情なき人とやいふべからん、

左近中将定親

さみだれによそ、の川岸水こえて、あらぬ、わたり、に舟よばふらし

これには、久霖水漲をよめるなるべし、實況なり、

藤原惟基

露をなとわたなるものと思ひけむ、我身も草にわかぬばかりを

あだとは、他にうつり易きをいふ詞なり、薄情ものをあだびと、いふも、他に心の

うつりかはればなり、この身をわをもへば、草にわかぬばかりが露に異なる所にて、

そのあだなることは、露よりもまされるものを、何とて露を、とれのが心の淺はかなるを咎めしなり、曲折吟嘆、句々深致、

藤原菅根朝臣、

秋風に聲を帆にあけて、くる舟は天の戸わたる、雁にそありける、

雁を舟にたとへしは、その聲を鴈櫓ともじに作りて、櫓音のやうにきこゆる故といへり、天の戸は、天門にて、空のことなれども、こゝは、天河の門にみるかたよからん。

遊義門院權大納言

言の葉にそへても今は返へさはや忘らるゝみに殘るれも影

情の切なる時は、かうやうの愚痴なる歌も、よみいづるなり、故に情のあふるゝ所、義をもて制せざれば、その弊といひべからず、

源頼家朝臣

春霞かすめるかたや津の國のはのみしま江のわたりなるらん

はのかにみゆるといふを、三嶋江にかけたるなり、

源家長朝臣

よしさらは身を秋風に捨はてゝ、たもひもいれじ、夕ぐれの空、

秋の夕ぐれの空は、物かなしきものといふ、よしさらば、秋風の吹くにこの身をまかせて、何とも我か心にねもひいれじとなり、をゝしき歌なり、

三春有輔

君かうゑし一むらすゝき虫のねのまけき野へともなりにけるかな

此歌は、有輔の友たちとのしどもの朝臣といふ人の住みたる家を、彼のとまともの身まかりける後に、秋の夜ふけて、よそより歸りかけに、かの前栽を見いれて、よ

みたるよし、詞書あり、としどもといふ人は、薄命の人とみゆ、あはれなる歌なり、抑
人生の榮枯浮沈、多くはかくのごとし、返すくも、徳を積みたくべきなり、

前僧正公朝

月艸の花すり衣かへす夜はうつろふ人を夢にみえける

月草は露草をいふなり、その花にてすりたる衣なり、衣をうらかへしてぬる時は、
戀しき人を夢にみるといふは、むかしのならはしなり、この歌は、衣をかへして、他
に心のうつろひし人を夢にみてなぐさむとなり、僧正の身にて、かやうのやくも
なき歌をよむ、中むかしよりのならひといふものゝ、興のさめたるわざなり、只歌
をもてあそびものにするゆゑ、かゝるあらぬ言の葉も口はしるなり、削るべき、

藤原長能

君か代の千とせの松のふか緑さわかぬ水にかけはみえつゝ

君か代の泰平を、ことほぎたる歌なり、さわがぬ詞、眼目なり、

右衛門督通具

とへかした尾花かもとの思ひ草まはるゝのへの露はいかにと

とへかしたとは、どひてくれと、願ふ詞なり、今の人は、このかしをにぞるはあし、なも
じは、語助なり、思ひ草にねのがれもひをよせたるなり、上に尾花といひしゆゑ、こ
ゝに野べといひたるか、こゝにのべといひたるゆゑ、上に尾花をいたしたるか、こ
れは、何のゆゑとも、心えがたし、いたづら詞なり、且れもひ草の露といは、通すべ

し、のべの露に何の用かある、只思草のある所を考らせたくばどへかした尾花か
野への思ひ草、まほるゝもとの露はいかに、とあらば、今少しきこゆべし、

平祐舉タカ

胸は富士袖は清見とせきなれや煙もなみもたえぬ日をなき
ふじにけふり、清見がせきになみと、むかへたり、なみに、涙をよせたり、たえぬは、た
えはつるなり、意は明かなり、

土御門院

横向の檜原の山の呼子鳥花のよすかに、きく人そなき

檜向のひはらは、大和の名所なり、呼子鳥は、古今集の秘傳とて、歌人は意味ありげ
にいへども、深山にて、一聲なきわたる鳥をきよて、かく名つけたるなり、よすがは、
たよりなり、花見にくれども、そのたよりに、この鳥の聲をきく人どなきとよせ給
ひしなり、呼子鳥に御意をいれさせ給ひしなるべし、世の人は、まつ心なきものな
り、焼野のさゝす、夜の鶴梁の燕、まやまの呼子鳥、ねやをえたひ子をねもふは、人間
よりも、ふかし、少しく心を留めてみれば、また以て天倫の情愛を慶するにたらん、
まかるに、花見時といへば、花の下によりつとひて、酒のみ、歌うたひて、日のくるゝ
もしらぬが多かれども、呼子鳥の一聲をきよて、あはれとほもふもの、誰かある、花
見る人はあれども、この聲きく人はなし、とこどわけて、歎かせ給へる御意ゆゑぞ、
もじを用ひ給ひしなり、ふかく心をつけて、味ふべし、

頓阿法師

數ならぬ三室の山の岩小菅いはねはしたに猶みたれつゝ

數ならぬ身を三室にかけしなり岩と上にいへる故したといへども心の底をい

ふなり身の貴き人は直ちにおもふことをいひいづるよすがもあれと身の賤し

きものははかかる所ありていひいでぬなりこれによりていよく下にみたれ

つゝゆくこれぞ大亂の本なるりける下情上達はよくく上の人のたしなむべ

きことなりこの歌牧民官たる人紳に記したくべきなり

近衛關白左大臣

れのつから都にかよふ夢をさへまたねとるかすみねの松風

かく山深く住めばみねの松とほそを擁しけるうへにふと都にかよふ夢をみて

もそれさへふきさますとなり全く人境にへたゞりたる情界をよみしなり幽峭

極まれり

右後撰百人一首の中藤原爲明朝臣の歌一首、出はみてみねされは、欠く

(完結)

隨菟錄

(承前)

片嶺芝庭

片嶺怨卿庭中生靈芝徵詩即賦此贈 東京 關澤霞菴

令德傳家已幾年靈芝一夜産庭前知君自是更遐壽不數商山皓髮仙